

## 1.18 うたた寝

私の住んでいる横浜の冬は、有り難いことに（日本海側の方に申し訳ないほどに）、晴れる日が多く、乾燥して、静電気対策に気を遣うくらいのもどかーな毎日です。

今日も朝から、テラスの長いすに寝そべって本を読んでいたら、いつも間にか「うたたね」をしてしまいました。

このところしばらく、なにかと忙しくて、この場所はむなしく空いていたのですが、ようやく時間がとれて本が読めるようになるなり寝てしまうというのは、ちょっと情けない。

でも、現実は全く甘くはなく、10分も経たないうちに、寒くなって目が覚めました。いくら太陽が降り注いでいても、冬は冬です。

ところで、「うたたね」は漢字で書くと「転寝」。

「居眠り」と実体的には変わりはないと思うのですが、居眠りは椅子などに座ってするものようで、身体を横にした居眠りが「転寝」でしょうか。

「うたたね」は、昔々から、よく歌に詠まれています。不思議なことに恋の歌が多いのです。

小野小町の次の歌は、大変良く知られていますのでご存じの方も多いのではないでしょうか。

うたたねに 恋しき人を 見てしより 夢てふものは 頼み初めてき （古今集）

[拙訳]

（うたた寝をした時の夢に、私の恋しい人が出てきてからは、あなたも私を想ってくれていると思うようになってしまいました。お願いですから、もう一度夢にでてきてほしいと思いが募る私です。）

古今集 12 巻の冒頭を飾る小野小町の夢三首の一つであるこの歌は、「相手が自分を想ってくれていると、その人が夢に出てくる」と考えられていたこの時代の信仰を知らないと理解しにくいのですが、絶世の美人と言われた小野小町でも、自分の見た夢にすがろうとする女性の切ない心が見えて、なんとも優しく、切ない気持ちになります。

ところで、小野小町さんに押されて、余り知られていないのですが、「うたたね」と言えば、式子内親王さんには、うたた寝の歌が多いのです。

数ある式子内親王のうたた寝の歌の中でイチ押しはこれ。

はかなしや 枕さだめぬ うたたねに ほのかにまよふ 夢のかよひ路 （千載集）

[拙訳]

(寝所以外の場所で思わず寝入ってしまったうたた寝では、思うあなたの夢を見ようと  
思っても、行き惑うばかりで、はかない思いがするばかりです。)

うたた寝も、ちゃんと場所を選ばないと、思う人には逢えないのですね。

さて、世が平安の時代を過ぎて、鎌倉まで下がってくると、さすがに、うたた寝と恋を  
詠む歌は少なくなるようですが、それでも、次のような切ない歌が残されています。

**袖の香は 花橋に かへりきぬ 面影みせよ うたたねの夢 (新千載 二条為子)**

[拙訳]

(うたた寝の夢の中で確かに香っていた橋の香りに、昔のあの方の袖の香りを思い出して  
しまいました。せめて香りだけでなく、あの方の面影も甦ってくださらないかと思う  
ばかりです)

この歌は、次の式子内親王の歌と古今集の詠み人知らずの歌の二つを踏まえて詠まれた  
ものと言われています。

**かへりこぬ 昔をいまと 思ひ寝の 夢の枕に にほふ橋 (新古今 式子内親王)**

[拙訳]

(あの方と過ごした素晴らしかった日々。決して戻ることはない昔のことを思いながら  
眠りに落ちると、夢の枕にあの方の付けておられた橋の香りが漂ってまいります)

**五月待つ 花橋の 香をかげば 昔の人の 袖の香ぞする (古今 詠み人知らず)**

この三つの歌は、古今集、新古今集、新千載集と時代を超えて「若かりし昔の恋」をテ  
ーマに詠われたものですが、「うたたね」も、高貴な女性がすると、このようになるので  
すね。

残念なことに、私の「うたたね」には、そのような奇跡は起こりませんでした。  
昔の思う人が出てくるどころか、危うく風邪をひきかかったというのでは、笑い話にも  
なりませんねえ。

この違いどうしてでしょうかね。

香りも色もない冬のうたた寝のせいでしょうか？

それとも、単に疲れて沈没しただけのうたた寝には、そんな神通力はないのでしょうか？

悲しいことに、昔の思う人は、私のことなどすっかり忘れてしまったせいでしょうか？  
それとも、うたた寝で昔の人のことを思い出すことのできるのは女性だけなんではな  
いかね？

## 1.25 山茶花と椿

山茶花は、別名「姫椿」といわれるように、椿と区別がつかないほどよく似ています。学名も、山茶花が *Camellia sasanqua*、椿が *Camellia japonica*。どちらも日本が原産地です。どちらが椿で、どちらが山茶花か区別できないと言われる方が多いですね、

落花の状況で区別するのが一番簡単ですが、一輪挿しの花器に挿してある椿や山茶花を、どちらか見分けるには、ほんの少しの知識を必要とします。

花が一重の場合、椿はその殆どがカップ状なのに対して、山茶花の場合は、花びらが大きく開く（平開）ことが多いようです。上の方の写真は椿で、下の方の写真が山茶花。



次に、もう一つの特徴として、花の中央にある雄しべの下半分がくっついているものは、まず椿。山茶花の場合は、雄しべが下の方まで分かれています。



ただ、椿も山茶花も一重だけでなく八重があり、両者ともに非常に品種が多く、例外も多いので、これだけで確実に判断するのは難しいのですが、葉の形も少し違いがあるようです。

椿の葉は山茶花と比べて少し細長く、山茶花の葉は先が尖っているのですが、これは相対的なものですから、両方比べなければ普通は判断が難しい。葉の外周りがかなりぎざぎざしている場合は、まず山茶花とみて間違いはないようですが、これも相対的です。最後の手段は、葉を陽にかざすと、椿の場合は葉脈が白く浮き出るのに対して、山茶花の場合は葉脈が黒く浮き出るのですが、活けてある花の葉をちぎることが難しい。まあ、結局は、専門家でもないのだから、あまりどっちか拘らないというのが一番と言

うことでしょうか。

ところで、文学の上では、椿と山茶花は、かなりの差がついています。椿が古くから史誌に登場するのに対して、山茶花は歌に詠われることもなく、椿に比べると少し日陰の花の印象が強いですね。

椿は、733年出雲風土記に登場するほか、万葉集にも出てきますから、昔から *japonica* の名にふさわしい扱いをされています。

わが門の 片山椿 まこと汝(なれ) わが手触れなな 地に落ちもかも (万葉 20-4418)

[拙訳]

(私の家の門に美しく咲いている椿の花のようなあなた。私が手も触れないうちに、他の人のところに嫁いでいってしまうのでしょうか。)

これに対して、山茶花が歌に詠まれることは殆ど無く、江戸時代までに、徳川御三卿田安家初代の田安宗武が詠んだ歌が一首あるくらいでしょうか。

しかし、現代では、山茶花の方がやや優勢。山茶花には誰もが知っている童謡がありますからね。

♪ さざんか さざんか 咲いた道  
たきびだ たきびだ 落ち葉焚き

これは、童謡「たき火」の2番の歌詞ですが、私たちの世代の誰もが歌ったことがあるはずです。

この「たき火」が、初めてラジオで放送されたのは、今から70年前、昭和16年の12月9日のことでした。

さざんかを歌ったこの歌は、誕生の時に、大変不幸な出来事に見舞われます。

その前日に当たる12月8日は、旧日本帝国海軍が真珠湾の米軍機動部隊を奇襲し、太平洋戦争が勃発した日でした。

このせいで、この歌は、次の日、軍からの批判を受け、僅か2日で放送が中止されます。たき火は、燃料となる落ち葉の無駄遣いであり、空襲の目標になるという愚劣な理由でした。

童謡すら自由に歌わせないような国が滅びるのは、当然のことかも知れません。

戦後、「歌のおばさん」で復活した「たき火」は、昭和27年、小学1年生の教科書に載り、私たちの誰もが、冬の初めに「さざんか」を目にすると反射的に口ずさむ懐かしい歌になりました。

最近、落ち葉焚きが禁止されるようになってきたのは寂しい限りです。

あ、そうそう、一つ言い忘れていました。

武家が、首が落ちるように落ちる椿の花を嫌ったというのは、全くの俗説。

武家の庭には様々な椿が好んで植えられていましたし、花のまま落ちる椿は潔き(いさぎよき)花と考えられていたようです。

俗説は、それらしく思えるのでもっともらしく言われると信じてしまうのですね。

## 1.30 赤穂義士の討ち入りと木戸番小屋

私、北原亜以子さんの小説が好きで、「深川滯通り木戸番小屋」シリーズを読んで以来、退職したら、木戸番小屋の番太郎のような仕事はないかなあ、と思っていました。この小説の主人公「笑兵衛さん」のような生活ができたらいいだろうなあって。

時代小説がお好きな方は先刻ご承知かと思いますが、江戸時代には、もっぱら治安の必要から、町ごとに木戸が設けられていて、夜遅くになると木戸は閉められ、夜間の自由な通行はできなくなっていました。

木戸が閉まる時刻は、夜の四つ刻（大体 10 時）。

これ以降、町々を徘徊する者は不審者とみなされました。

よく時代劇で、黒づくめの盗賊が大勢タッタッタと走っているシーンがありますが、独りならともかく、これは、実際にはなかなか難しい。

木戸番に了解を得れば、脇の潜り戸から通してもらえるのですが、その場合も、木戸番が次の木戸まで同行するか、(送り)拍子木を打って次の木戸に知らせる決まりで、通行に必要な時間が過ぎて現れなければ、非常手配がされる仕組みになっていました。

まあ、今でいえば、夜間外出禁止令ですかね。

江戸は、世界有数の大都会。にもかかわらず、警察官に当たる与力、同心、火附盗賊改方の数は圧倒的に少なかったことが知られています。

その割に犯罪が少なかった背景には、木戸番や自身番制度など江戸庶民による自主防犯組織が確立していたのですね。

ここで疑問。

赤穂義士の討ち入りの時は、47 人もが雪の中を吉良邸目指して走っているのに、咎められなかったのはなぜ？

これ、後の人が書いたフィクション？



いえいえ、実は、討ち入りがあったのは元禄 15 年 12 月 14 日 (1702 年 1 月 30 日)なのですが、この頃、木戸番・自身番制度が整っていたのは、大川(隅田川)の西側までで、新開地の両国や深川など東側はまだ木戸が整備されていなかったのです。

吉良邸があったのは大川の東側、現在の両国三丁目。

義士達のスタート地点は、これも大川の東、現在の立川三丁目にあった堀部弥兵衛宅と

杉野十平次宅、それに吉良邸裏門近くの家を借りていた前原伊助宅ですから、全行程、木戸が存在しなかったのですね。

大川以東の両国本所に木戸が整備されたのは、江戸の人口が増え、新開地にも犯罪が増え始めた 1740 年頃でした。

木戸が開くのは、明け六ツ（大体 6 時）。

遠くへ旅行に行くので早く出立したい人は、あらかじめ断っておいて、暁七ツ（大体 4 時）に開けてもらっていました。

### ♪ お江戸日本橋七ツ立ち

ですね。この歌、この後

### ♪ 初上り 行列揃えて アリイのサ コチャ高輪 夜明けて提灯消す コチャ コチャ

と続きます。だいたい 6 km 先の高輪でしらじらとしてくるのですから、4 時過ぎ出発で間違いありません。ところで、行列揃えてというのは、大名の参勤交代行列ではありません。

初上り、つまり上方本店から江戸店に派遣されてきた小僧さんたちが、初めて上方に帰る時にみんなで集って、集団帰郷する習わしになっていたのですね。

さて、木戸番の給料は、町の負担。自身番の費用をはじめとした町の管理費用として、住民から 1 軒当たり月 20 文程度が徴収されていたので、この中から支払われたのです。

ですから、木戸番は公務員ではなく、今なら、マンションの管理人ってところですかね。

木戸番の番太郎は低賃金ですから、やはり退職した老人が多かったようで、笑兵衛さんのような若い人は余りおらず、住んでいる木戸番小屋の中で、焼き芋や駄菓子、草履、鼻紙等の日用品を売って、生計の足しにしていました。

今で言うと、町の小さなコンビニですね。

ころころ笑う笑兵衛の奥さんの「お捨て」さんも、売り上げに随分協力していますね。

木戸番は住み込みでしたが、番小屋は非常に小さく、笑兵衛さんの小屋も、店の部分の奥に一部屋あるだけです。

なお、木戸番小屋は自身番と混同されることが多いのですが、これは別のものです。

下の絵は、木戸を中心に右が木戸番小屋、左が自身番です。木戸番小屋には、何か売っているのが見えますね。



江戸市井之図 木戸〈中央〉と自身番所〈左〉(守貞漫稿)

自身番は、町内で軽い犯罪をおかした者をとりあえず一時留置して同心等に引き渡すというような役割を果たしていたもので、自身番の「自身」というのは、当初地主自身が詰めていたからこう呼ばれたのですが、すぐに、町役が詰めるようになって、名前だけが残ったものです。

北原亞以子さんは、深川濤通りの「木戸番小屋は、枝川と大島川が一つになって隅田川にそそぎこむ、町の西南の角にあった」と書いておられますから、笑兵衛さんの木戸番小屋は、大川に架かる永代橋の下流の東側、中島町の南西端の橋の袂にあったのですね。虫眼鏡片手に、江戸の切り絵図を見ていると、最近亡くなられた北原亞以子さんの優しい笑顔が浮かんできます。

## 2.1 嫌いな2月

1月の次に2月が来るのは当然だと思っている方は、真面目で、頭からものごとを疑ったりはしない誠実な方です。

私、高校三年生の時に、どうして、こんなにイヤな月が、1月という華やかな月の後に続くのか、不思議に思ったことがあるのです。

はじめは、2月という月は、みんながイヤな月だなあとと思っているから、他の月が30日か31日あるのに、28日しか置かないで、短くされたに違いないと思って、調べもせず、すべての月を31日にして、2月をもっと短く24日にしたらどうかって考えたのですね。

でも、当時の友人にその話をしたら、なんとも言えない目で私の顔を見て、「お前、大丈夫か？」

受験勉強のしすぎでおかしくなったのじゃあないかと思われたようです。

このため、この話はしばらく封印していたのですが、その後、晴れて大学に入れたので、調べました。

当時は、調べるのになかなか苦労した記憶があります。

随分昔のことで、正確に覚えているわけではないのですが、昔々、古いローマの暦は、今のMarch(3月)からスタートしていて、February(2月)が終わりだったのですね。

(正確には、もっと前の古代ローマでは、1年は10ヶ月、304日で、10月が終われば暦は終了し、あとの60日余は暦無し(農耕には不要)だったのですが、今回の話には直接関係が薄いのでそこは省略)

そもそも3月は、ローマの軍神マルス(Mars)の月。マルスは、農耕を司る神でもあったので、一年のうち農耕がスタートする3月に置かれたのです。写真は、ローマコインのマルス神。



一方、2月は、贖罪神ファブラウスの月。年の終わりに過ぎていく一年を顧みる月だったのですね。

だから、年の終わりに、まあ、いわば年末調整して、残った日をこの最後の月にまとめたものだから、28日とか29日という他の月とは日数が違う形になったようです。

それを、ユリウス暦が作られたときに、1月スタートに変えちゃったみたいなんですね。

1月は、ヤヌスの神（Janus）の月。ヤヌスは、ものごとの始めと終わりを司る神とされてましたから、やっぱり、これをトップにした方が収まりが良いとでも思ったのですかねえ。写真は、ローマコインに刻印されたヤヌス神。



ちなみに、多くの方がご存じの通り、このときに、ユリウス・カエサルと初代ローマ皇帝アウグストゥスの月を、それぞれ7月 [July (Julius Caesar)]、8月 [August(Augustus)] に置いたため、2ヶ月のずれが生じたわけです。

つまり、

September (septem = seven) 7→9月

October (octo = eight) 8→10月

November (novem = nine) 9→11月

December (decem = ten) 10→12月

8本の足を持つ蛸さんをオクトパスと言いますが、2つずれたために、イカさんみたいになっちゃったんですねえ。シーザーくんの息子アウグストくんも罪なことですな。

さて、このイヤな2月、日本では如月（きさらぎ）と呼ばれますね。

でも、漢字の「如月」とひらがなの「きさらぎ」との間にはなんのつながりもありません。

漢字の如月の方は、中国からの借り物。

中国古典に「2月を如となす」とあるところから来ています。

つまり万物が、動き始める春を前に、モゾモゾと蠢動し始める月だと言うのですね。

「如者 隨從之義、萬物相隨而出、如如然也」（爾雅「釈天」）

一方、日本固有のひらがなの「きさらぎ」の方は、旧暦2月が、3寒4温で、暖かくなつたと思ったら、急に寒くなることから、春の衣の上に重ね着をする意味で、「衣」を「更」に重ね「着」するから「衣更着（きさらぎ）」というように説明されることが多いようです。

まあ、私の嫌いな2月、「ああ2月、どうしておまえは2月なんだ」という問いかけをしてみても、所詮は余り変わらないみたいですね。好き嫌いは、ジュリエットと同様、ど

うにもなりません。

ところで、花札では、2月は「梅に鶯」。

いっそ2月を「梅香月」とでもしてくれると少しは気持ちが明るくなるような気もするのだけれど。



## 2.3 節分の鬼

今日は節分。明日は立春。

形の上だけとはいえ、春の先駆けの節分行事で、悪役として豆をぶつけられる鬼も良い迷惑ですねえ。

ところで、この鬼なんですが、悪魔とどう違うんでしょうかね。

悪魔という場合、西洋の悪魔だけでなく、仏教の悪魔（魔羅、第六天魔王）も入れると、なかなか一筋縄ではいきません。

さて、鬼の方から話をしますと、日本の場合、鬼は結構いろんなところに出てきます。まず、地獄の獄卒の鬼。

これは、地獄の現場責任者の閻魔さんの部下。一番下っ端の地獄の公務員ですから、これに豆をぶつけるのは公務執行妨害。

というより、ちょっとカワイソー。

今の公務員いじめみたいなもの。

次が、平安時代から室町時代にかけて物語などに登場する鬼。

大体、人をとって喰らうから、この辺の鬼に、うっかり豆をぶつくと、反撃されて食べられちゃうおそれが大。丹波の大江山の鬼さんが代表選手ですね。

ここは、やはり、源の頼光サンや渡辺の綱さんのような専門家に登場して貰わないと退治できません。

でも、この鬼さんたち、だんだん神通力を失ってきて、江戸時代になると、一致団結した人間様の方が強くなって、豆にやられるようになるんですね。

昔、三途の川の前で「お前は渡っちゃダメ！」なんて言って追い返していた幽霊クンに、お株を奪われて、今や「幽霊怖いけど、鬼なんて怖くないよ」なんて子供にも言われる始末。

豆に逃げ惑うようじゃ、仕方ないですよ。

村や町の外れには、お地蔵様や道祖サマが見張っていて、なかなか結界の中には入っていけない。

とうとう、鬼クン、閉め出されて「よそ者」扱い。

気の弱い鬼クンなんかは、「泣いた赤鬼」（浜田広介著）クンのように、入れてくれな  
いかなあなんて熱望する始末ですね。

でもね、最近、鬼クンたちの中にも、頭の良いのが出てきて、

「厄いを持ってくるのは時代遅れのお爺さんの時代の先輩鬼達。昔と違って、今はね、厄の代わりに福を持ってくるんですよー」なんて、ニコニコ顔で、入ってくるんですね。

ときどき、ころっと騙されて、アイツ、やっぱり鬼だったか、と泣かないように。  
高齢者の周りは、角を隠して、シマシマパンツの上からズボンはいてる現代的な鬼ばかりですからね。

ところで、鬼さんたちのトレードマークの角は牛サンから、シマシマパンツは虎さんから受け継いだものって知ってますよね。  
なんせ、鬼さんたちって、人間社会にとっての鬼門の「丑寅（うしとら）」出身ですからね。

ところで、今の鬼さんたちは、牛さんと虎さんの隣にいる鼠さんとウサギさんから、衣装を借りているんですね。子－丑寅－卯ですからね。  
見かけだけは、やさしい格好してるんですよ。  
だから、角にかぶせた耳がやたら大きい。よく見ると、シマシマパンツの上からはいたズボンからしっぽが出ている。  
ちゅうちゅうマウスを使って、こっそり悪いことし放題です。

豆撒きの豆は、「魔滅」のまめ。  
とりあえず、効き目があるかどうか分からないけれど、PCにも撒いておきましょう。

あ、豆は、炒らなきゃ効果がないので気をつけましょう。  
豆を煎ると、鬼の力の源泉「金」を封じ込める力が出てくると考えられているのですね。  
つまり、「火克金」。  
それで、その封じ込めた豆を食べてしまうと、これで完璧。

京都勤務時代、節分の日、吉田山の中腹にある吉田神社にお参りしていました。  
厄塚に触れて、お札を買って、屋台をひやかして、南に下って聖護院までとことこ歩き、須賀神社で懸想文を買って、今年もこれで、福ばかりと満足して終わり。



あ、調子に乗って、悪魔のことを書くのを忘れてた。  
まあ、悪魔の方は、鬼と違って、自分の心の問題だから、そのうち、時間を見つけて書くことにしましょう。